

# 文 化

昨年十二月二十六日から四日間、東京・池袋のホテルに世界各国の外交官二百三十人が集まり、国連関係機関の会議が開かれた。

## 教育プログラム

第一委員会では冒頭、ニューヨークランド大使が「過去の大洋州での核実験や、その後の対応からフランスは信頼に値しない」と演説。安全保障理事会の議題であるエチオピア・エリトリア問題は、ちよと国境での紛争が再燃するかどうかの瀬戸際にあり、激しい議論が繰り返された。

「模擬国連(MUN/Nodel United Nations)」の全日本大会での出来事である。学生に国連事務局スタッフや加盟国代表団の大使役を割り当て、現実さながらに国連会議を英語と日本語でシミュレーションするという教育プログラムだ。

MUNの歴史は



大使役の学生が活発に議論する会議の一幕

## 丁々発止学生模擬国連

◇多国間の会議外交を通じ、国際問題や交渉術学が

星野 俊 也



一九三三年、米国のハーバード大学で開催された「模擬国際連盟」にさかのぼる。学生が担当する国の外交方針や政治・経済情勢などを事前に研究し、多国間で繰り返し行われる会議外交を体験。公式・非公式の交渉を重ね、決議や宣言の採択に至るまでのプロセスで、議題となる国際問題や関係諸国の立場、国際政治のダイナミズムなどを学ぶ。

議場で執り行われる。日本では八三年、上智大学の学生だった私が当時の緒方貞子先生のゼミ仲間たちに声をかけ「日本国際連合学生連盟模擬国連実行委員会」という組織を立ち上げた。ほんの人数で始まった同委員会は「模擬国連委員会」と名前を変え、全国の学生三百人余りが参加する大所帯に成長している。私が初めてMUNの存在を知ったのは八二年、

「非難する」の一語を巡って駆け引きが続く。「深刻な懸念」が真に「深刻な結果」を招く重みを伝えるときもあれば、何とか実害を避けようとする文に工夫を凝らすときもある。会議中は草案や対抗案、修正案などが次々と出され、配布される。全日本大会でも四日間で九千枚の紙が出回った会議があったそうだ。

「国連担当作り」国際問題の知識や交渉術などを学べる活動に教育関係者の関心も高まっている。全日本大会には社会人も参加するし、主婦のグループから「やり方を教えて欲しい」という依頼を受けて学生が指導することもある。初心者にMUNを説明する時には「国連担当作り」といった架空の議題を持ち出したことも。国連が担当を作ることになり、中身を話し合う。宗教上の理由で食べられない食材は排除。地域のバランスを考えてパンをクスクスに変え、ココアを付けて途上国の輸出を促進するなど、身近な話題を入り口にして国際問題に触れてもらうわけだ。

今年八月、東京に高校生を二、三百人集めてMUN大会を開きたいと考えている。近年はイラク戦争を回避できなかった国連に対して失望の声が高まっている。組織の問題もあるが、国連は国際平和と安全の維持には不可欠な機関だと私は考えている。国連を動かすのは私たち自身。国連や国際政治学の専門家の一人として、そんな思いを今度高校生に伝えたい。(ほしの・としや)大阪大学教授

ある。日本では83年から現在、この活動は世界に広がり、各国で大きな大会が催されるまでになっている。米国では毎年春、約三千人が集まる全米大会が開かれ、初日の会合はニューヨークの国連本部内の総会場で開き、会式をはじめ、実際の会議

留学先の米国の大学だった。発言権の確保に始まり、決議草案や修正案の書き方、提出のタイミング、議事進行のルールなど国際会議の極意や裏技を熟知した学生が「大使」

でも最終合意を取り付ける場であり、協議は廊下やホテルの部屋などで深夜まで非公式に行われる。利害が対立するなかで仲介役や議長は議論をどう解きほぐし、合意点を見いだすかが腕の見せ